

## 研究ノート

### 日本マンガ『よつぱと！』翻訳比較研究に関わる補遺

大塚 萌

Moe OTSUKA

#### 1. 本報告の目的

筆者は対象作品『よつぱと！』を用いて、これまで様々なテーマでマンガ翻訳分析を行ってきたが、研究報告執筆時期及び出版時期の関係で、『よつぱと！』最新刊である13巻の分析を含めることができなかった。しかし、当該13巻の文字テキスト<sup>1</sup>内容は、今まで筆者が分析対象にしてきた文化的物品や、言葉の間違いの翻訳に関して新しい知見を与えてくれるような例が多々見られた。そのため、今まで発表してきた分析をさらに進めるための手掛かりとして、13巻における翻訳例の中から、いくつかのテーマごとに補足分析を加えることを本報告の目的とする。

#### 2. 対象作品『よつぱと！』について

『よつぱと！』（アスキーメディアワークス刊）はあずまきよひこによる幼児〈よつぱ〉<sup>2</sup>の日常を描いたマンガである。5歳児の〈よつぱ〉が会う日本の日常的な事柄やイベントを幼児らしい新しい目線で再発見していくことがテーマで、〈よつぱ〉と周りの大人や子どもたちの日々の生活を細やかに追っていく内容になっている。

2017年2月現在ではコミックス13巻まで出版されており、雑誌連載も継続している。最新刊13巻は2015年11月に発売され、英語版は2016年5月（Yen Press刊・Stephen Paul訳）、ドイツ語版（TOKYOPOP刊・Marcus Wehner訳）は2016年11月に翻訳・出版された。

対象となる13巻は、前12巻の後半部分を占めて描かれたキャンプのエピソードが終わり、キャンプから帰ってきた翌日、〈よつぱ〉が隣家の綾瀬家長女である〈あさぎ〉を相手にキャン

---

<sup>1</sup> マングの画面における、登場人物が発声した言葉、あるいは心の中で内面的に発した言葉を指す。その大部分は活字で吹き出しの中に配置される。場合によっては、吹き出しの中や外に手書きで挿入される場合もある。マンガの中の文字情報の分類については、ウンサーシュッツなどを参照。

<sup>2</sup> 本報告の中では、人物名を〈〉でくくって示す。また、その際表記する人物名は、作品内の通称を用いる。これは、物語の中では〈よつぱ〉を中心とした人物関係の中で呼称が使用されることを理由に、作品の中で改まって名前を名乗る場面が描かれない登場人物も存在し、彼らの本名が明らかでない場合もあるため。たとえば、長らく〈小岩井〉という苗字しか作品中で言及のなかった〈よつぱ〉の父、〈とーちゃん〉のフルネームが明らかになったのは、〈ばーちゃん〉にファーストネームで呼ばれる場面が描かれたこの13巻でのことである。（あずまきよひこ（2015）『よつぱと！』13巻、アスキーメディアワークス、p.130）

プのみやげ話をする第 83 話「よつばとえだなど」を中心に、ごく日常的な場面が描かれる。

その代わりにこの巻を占めるエピソードは、事前の相談なしに突然小岩井家に訪れ滞在する〈よつば〉の〈ばーちゃん〉をめぐるものである。

今までの巻でも存在自体は仄めかされていたものの、〈ばーちゃん〉が物語に姿を現すのは初めてである。自身の用事のついでに小岩井家の近辺までやってきた〈ばーちゃん〉は数々のおみやげを携え、3 日間滞在する。

対象とする 13 巻は、〈よつば〉と〈とーちゃん〉が現在の住まいに引っ越してきたところから物語が始まる同作品において、今まで不明だった〈とーちゃん〉のフルネームが明らかになったり、物語には描かれない〈とーちゃん〉の親戚や交友関係が透けて見えるような描写があったり、『よつばと！』作品内で明確には語られない背景が垣間見える巻でもある。

また、〈よつば〉の言動の端々から、ぬいぐるみを使った人形遊びをする一方でセミ捕りや釣りなどのアウトドア活動にも積極的であり、その破天荒な振る舞いや〈とーちゃん〉に影響されたであろうやや乱暴な言葉遣いから、女兒というよりはニュートラルで無性的な「子ども」であった〈よつば〉が現代的な「幼児」らしい振る舞いをしている場面、一般的な性別にのっとった嗜好を発現している場面などが特徴的である。たとえば、きゃりーぱみゅぱみゅ<sup>3</sup>の歌と踊りを真似ることができる<sup>4</sup>、女兒向けアニメのプリキュア<sup>5</sup>をモデルにしたイラストを描く<sup>6</sup>、などのエピソードがある。また、それらの時代的な要素がはっきりと言及されたという意味でも、普遍的な生活感や日常感を描いてきた同作品の中においても特異であると考えられる。

翻訳上の問題点としては、〈ばーちゃん〉のセリフが関西弁を含んだものであることが大きい。文字テキスト上でも、関西弁であると認識可能な程度の語彙・発声の訛りなどが実際の発音を真似て表現されている。また、物語上でも〈よつば〉、〈ばーちゃん〉、隣家の綾瀬家三女（恵那）が一緒にいる場面において、〈恵那〉が〈ばーちゃん〉が関西弁であることを指摘するセリフがある<sup>7</sup>。また、〈ばーちゃん〉が関西弁を喋っていることに影響されてか、普段は標準語的口語を喋っている〈とーちゃん〉や〈よつば〉が関西弁的な特徴を持った話し方に変わっていると考えられるセリフもいくつか見られる<sup>8</sup>。

こうした関西弁のような、本来は口語に現れる諸特徴が文字テキストに現れる際、翻訳にお

<sup>3</sup> 2011 年に歌手デビューし、その独特なファッションやパフォーマンスが特徴の女性アーティスト。

<sup>4</sup> 前掲書、p.72

<sup>5</sup> 2004 年から現在に至るまで 10 年以上にわたって放映され続けている女兒向け人気シリーズアニメ。

<sup>6</sup> 前掲書、p.132

<sup>7</sup> 前掲書、p.157

<sup>8</sup> たとえば、〈ばーちゃん〉に呼ばれた〈とーちゃん〉が「なんやー？」と答えるセリフ（前掲書、p.149）、〈ばーちゃん〉に〈よつば〉の想像した生き物である「くろいおばけ」の説明をしている際の、〈よつば〉の「おるよ！」というセリフなどがある（前掲書、p.164）。どちらのセリフも、〈ばーちゃん〉の呼びかけに対応する位置に出現することに注目。

いては①翻訳語版文字テキストにおいて、どのようなテキスト特徴で代替するか、あるいは代替しないか、という表現上の問題と、②方言を代表とする特殊な話し方の特徴と結びついた話者の性格付けをどのように示すか、というキャラクター性の問題の二つが生じる。詳しくは役割語にまつわる先行研究がある<sup>9</sup>が、その問題と実践を端的に言えば、マンガ翻訳における役割語の翻訳は、たいていの翻訳語の場合、①表現上の問題においては日本語の役割語のバリエーションよりも少ない選択肢しかない場合が多く、しかも②キャラクター性の問題まで含めて再現するのが非常に難しいため、日本語のサブカルチャーの持つ複雑なキャラクター性の絡んだ言語様式を正確に再現する場合はかなり少ないと断言している状態にある。特にマンガという媒体の文字テキストが持つ、吹き出しという限られたスペースによるテキスト量の制限が役割語の再現を阻む理由の一端となっているとも考えられる。

このような役割語の翻訳が持つ受容側言語文化の表現幅の相違という問題を、当対象作品ではどのように対応しているかが注目すべきテーマの第一である。

第二に、これまでの分析においても注目してきたことば遊び・言葉の間違ひも引き続き豊富な翻訳例が採取できた。これは主に〈よつば〉の年齢的な理由、加えて外国人であるという出自的な理由で、言語習得の発達段階途中である日本語を表現するための要素であると言ってよい文字テキストである。こうした要素がどのように表現を用いて翻訳されているか、どのような文字テキストに挿入されているかについて引き続き分析を行う。

その他に第三のテーマとして、翻訳語版分解においてなじみのないものの翻訳、特にこれまで発表した研究報告のテーマであった「たい焼き」、「セミ」に関わる文字テキスト例が採取できたため、追加報告とそれによる分析を行う。また、他の文化的事物の翻訳実例もいくつか見られる。

これらのテーマに沿って翻訳例を分析することで、マンガ翻訳という問題と実勢に当たらない観点を提示することが、本報告の目的である。基本的には日本語とドイツ語版の比較を行うが、対照した際に知見を得られる場合には英語版も参照する。

以下の分析では、日本語・ドイツ語・英語の例文番号をそれぞれ j, d, e で示す。引用箇所が複数の吹き出しにまたがる場合、“/”で区切って示す。また、特に断りがない場合には、『よつばと！』からの引用である。英語版の文字テキストはすべて大文字で表記されているが、読みやすさを考慮して、標準規則に従った表記に直して引用している。

### 3. 1. 文化的事物の理解と翻訳についての補遺

これまでの研究報告において、文化的事物の翻訳分析の対象として「セミ」に関する語と「たい焼き」を取り上げて論じてきた。本報告の対象作品である『よつばと！』13巻には、それぞ

---

<sup>9</sup> キャラクターの話し方と翻訳の問題を取り上げた定延（2014）などがある。

れの語の翻訳について新しい考察を可能とする文字テキストが採取できたので、補遺的な内容を報告する。

まず、『よつばと！』における「たい焼き」の語の翻訳は、同作品内に複数回登場する文化的物品であるが、それぞれ取られる翻訳方法が異なる。また、『よつばと！』のドイツ語版翻訳者が手掛ける『あずまんが大王』においても「たい焼き」が登場するが、そこでも異なる翻訳方法がとられている語であった。

“**Taiyaki**”と音訳される他に、ドイツ文化において置き換え可能であると考えられる文化要素に置き換えられている場合があった。その際、特徴的なのは甘い菓子的な要素に置き換えられる場合と、魚に関わる、あるいは形状的な類似という文化的な要素を軸にしたか、または単純な語彙の対応を軸に置き換えたのか、白身魚のフライ料理を指す“**Back-fisch**”（焼き一魚）という語が置き換え語として現れる場合が存在することであった<sup>10</sup>。

「たい焼き」の語が13巻にも登場する。菓子のたい焼きそのものではなく、〈よつば〉と〈風香〉の砂遊びの場面で、魚の形の型を使った砂団子を指している変則的な例である。

	(1j)13巻, p. 43	(1d)Bd. 13, S. 43
風香	んじゃ私魚つくろー	Dann mach ich einen Backfisch. (じゃあ私は「白身魚のフライ」を作る)
よつば	それは <u>たいやき</u> ！	Du meinst, einen <u>Taiyaki</u> ! *Waffelgeäck mit unterschiedlichen Füllungen. (ワッフルのような焼き菓子で、様々な詰め物が入っている)
よつば	こっちがあんこでこっちがクリーム	Die ist für die mit Anko**-Füllung und die für die mit Sahne! (これはあんこ味で、こっちはクリーム！) **süße Bohnenpaste (甘い豆のペースト)

例 1-1

空き容器を使って砂を型抜きする遊びをする〈よつば〉を見て、〈風香〉は魚型を手にする。それによって作る砂団子を想定し、〈風香〉は「魚」と呼ぶが、ごっこ遊びをしている〈よつば〉はそれを「たいやき」だと修正する。

(1-1d)では、「魚」は“**Backfisch**”、「たいやき」は“**Taiyaki**”と対応させてある。

「たい焼き」の語が“**Taiyaki**”と対応していた例は、『あずまんが大王』2巻、2007年翻訳の『よつばと！』2巻がある。音訳を用いる翻訳には注が付けられて説明が追加されるのはどの場合にも同じである。しかしそれぞれの例において付けられている注の内容は異なる。

<sup>10</sup> 「たいやき」が“**Backfisch**”の語で翻訳されている例は、Azuma, Kiyohiko. (2007-2013) Yotsuba&!, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 5, TOKYOPOP, 138にある。

	(1-2)『あずまんが大王』2 巻, p. 24	(1-2d) <i>Azumanga Daioh</i> , Bd. 1, S. 182
メニュー	カロリーひかえめ 小倉	Toiyaki(ママ) mit wenig Kalorien*. ( <u>といやき</u> カロリー少な目) *japanisches Gebäck (日本の焼き菓子)

例 1-2

	(1-3j)2 巻, p. 68	(1-3d) <i>Yotsuba!</i> , Bd. 2, S. 68
店員	お嬢ちゃん <u>たいやき</u> 買ukai?	Hallo, Kleine. Möchtest du einen Taiyaki*? (こんにちは、お嬢ちゃん。 <u>たいやき</u> 欲しい?) *Ein mit süßer Bohnenpastete gefülltes Gebäck in Fischform. (甘い豆のペーストが中に詰まった魚型の焼き菓子)

例 1-3

これらと比較すると、注で補われる説明の内容が該当語の周囲の表現などによって調整されていると考えられる。

(1-2d) の場合には、前に挙げた「たい焼き」の語が音訳される例<sup>11</sup>がある他に、“Shokofisch” (チョコレートの魚) と置き換え訳をされている文字テキストがある他、さらに別の文字テキストの中でフレーバーのバリエーションがいくつか挙げられている<sup>12</sup>。また、マンガの画面の中にたい焼きのイラストが描き込まれている。ここから、読者は“Taiyaki”が魚型であること、クリームなどの甘いフレーバーの食べ物であることが理解可能である。そのために、「たい焼き」自体の語に付けられる注は、日本の文化的な焼き菓子であると補足するだけでどんなものを表現しているか理解可能であると考えられる。

それに対して (1-3d) では、イラストに魚型の形状が描き込まれているが、ケーキと対比されうるような菓子である<sup>13</sup>という以外に情報がない。そのためにこの箇所では、詳細な追加情報が示されているのではないかと考えられる。

そして (1-1d) では、注で追加された情報はたい焼きの詰め物に言及したものになっている。これは、〈風香〉の間違いを修正した〈よつば〉が、二つの魚型で作る砂団子がそれぞれ別々のフレーバーであると説明する後の文脈を想定してのものと考えられる。

この三例を比較した場合、注で説明する内容がそれぞれ異なるのは、周囲の文脈やイラスト

<sup>11</sup> ただし、“Toiyaki”と誤字があった。

<sup>12</sup> Azuma, Kiyohiko. (2012) *Azumanga Daioh*, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S. 181-182

<sup>13</sup> 〈よつば〉たちが商店街の中を経由した際にたい焼き屋の前を通りかかったのは、綾瀬家の〈かーちゃん〉にケーキを買ってくるようお使いを頼まれたためである。たい焼き屋にたい焼きを勧められた〈よつば〉は、「ケーキを買いに行くから」という理由で、その勧めを断っている。(あずまきよひこ (2004) 『よつばと!』2 巻、アスキーメディアワークス、pp. 68-69)

の有無などを加味した結果であると考えられる。

一方で英語版では、注を付けるべき物品とそれに対する説明のデータベースのようなものを持っており、そのデータベースを基に翻訳内容と注の内容を決定するという方法を取っているのではないかと考えられる<sup>14</sup>。

さらに例 1-1 で特徴的なのは、「たい焼き」をめぐる翻訳に登場したことのある“Backfisch”の語が、“Taiyaki”と別のものを指して並列的に出現する点である。

「たい焼き」と対応する際の“Backfisch”は、形状・文化的な類似かまたは語彙的対応を根拠とした置き換え語であると考えていた。しかし、この例を参照した場合には、“Taiyaki”と“Backfisch”は全く別の物として扱われている。また、“Backfisch”という語が本来指す「白身魚のフライ料理」は、このイラストに描かれているようなまるごとの魚の形をしておらず、この語がフライ料理を意味するとすれば、形状的な類似はない。

ここから、魚に関する食べ物である、まるごとの魚ではなく何かしらの調理をされた料理である、手で持って食べるような形状である、などの類似によって置き換えられた対応関係にあるのではなく、複合語を形成する語を逐語的に翻訳した語として“Back-fisch”（焼き一魚）を用いているのではないかという可能性が指摘できる。

もう一つ補遺的な内容として、「セミ」に関する語の翻訳について見る。『よつばと！』の作品においては、「セミ」に関する語が多数現れ、しかも物語の文脈上複雑な訳し分けが必要とされる語として、特徴的な翻訳が行われていた。また、ドイツにはセミが生息しないという文化的背景から、「セミ」と辞書的に対応する“Zikade”の語を避け、「セミ」よりは文化的になじみがあり、古くは『イソップ寓話』で「セミ」に対応する語として選択された“Grille”（コオロギ、キリギリス）の語を用いているのではないかと考えられる翻訳例が見られた。

「セミ」が生息していない地域における翻訳語版読者の理解を配慮した翻訳、あるいはなじみのなさを支えているような翻訳語の表現の幅を考えるために、一つの例を見る。

『よつばと！』のドイツ語翻訳版では、文字テキストの中に含まれる以外の、コマの中に手書き文字として描き込まれたオノマトペが翻訳されることが少ない。ただしその傾向は巻によって異なり、10巻ごろから大部分のオノマトペが翻訳される方針に切り替えられた。その際、完全にアルファベットレタリングに置き換えられている場合、日本語の横に翻訳語を添える形の両方の方法を使って翻訳されるようになっている。

13巻の中で虫が鳴く声を翻訳してある箇所がある。

---

<sup>14</sup> 英語版では、同じ物品について繰り返し注が付けられる場合、全くの同内容である場合がほとんどである。



	(2)13 卷, p. 61	(2d)Bd. 13, S. 61
虫の声	リー リー	Zirp Zirp (!リーリー)

例 2

ここでは、「リーリー」というオノマトペで秋の夜に鳴く虫の音を表しているのが分かる。一方ドイツ語でそのオノマトペに対応しているのは、“Zirp Zirp”という語であり、これは『よつばと!』1巻で〈よつば〉がセミの鳴き声を口真似していた「じーじー」というオノマトペに対応するものと同じものである<sup>15</sup>。

セミの鳴き声に対応する翻訳語は、これ以外につくつくぼうしの鳴き声に対応する“Zzziih”<sup>16</sup>が他にあるが、セミが『よつばと!』の物語に現れるのが最初の方の巻に偏っているために、オノマトペが翻訳される例が少なく、これ以外に例がない。

英語版においては、オノマトペ翻訳の方法がドイツ語版と異なり、日本語版のオノマトペの音訳と英語でカッコに入れて相当するオノマトペを、画面の中のオノマトペ文字列のそば、あるいは欄外の余白に添え書きする方法がとられている。そのため、英語版読者はそもそも日本語でのオリジナルオノマトペをマンガ画面から読み取ることができるようになっているのである。ただし、今回扱っている二つのセミの鳴き声のテキストは、「じーじー」という鳴き声は、〈よつば〉による鳴き真似なので文字テキストであるため、オノマトペ翻訳の方法がとられていない。それでも、「じーじー」に相当する文字テキストは“Zweee”<sup>17</sup>、つくつくぼうしの鳴き声オノマトペには“Tsukutsuku boushi (chiin)”<sup>18</sup>と翻訳されている。

ドイツ語版における少ないオノマトペ翻訳例の中でも、セミの鳴き声に二種のオノマトペが使い分けられていることは、つくつくぼうしが『よつばと!』の物語において特別な役割を持つ昆虫であり、その他の一般的なセミと差別化する必要があったためであると考えられるが、つくつくぼうしの特別性は以前の研究報告で詳しく述べたため本報告では立ち入らない。

注目すべきは、セミの鳴き声と秋の夜の虫の鳴き声という全く異なるオノマトペに対して、同じドイツ語オノマトペが対応させてあるという事実である。ここから、そもそもドイツ語における表現の中に虫の鳴き声のオノマトペのバリエーションが少ないことが考えられる。また、表現の幅が少ないという条件の他、セミや他の鳴く昆虫の鳴き声を識別する下地がドイツ文化にはないという文化的背景が、セミの分布という条件などからも考えられる。

<sup>15</sup> あずまきよひこ (2003) 『よつばと!』1巻、アスキーメディアワークス, p. 32 および, Azuma, Kiyohiko. (2007) Yotsuba&!, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 1, TOKYOPOP, S. 32

<sup>16</sup> Azuma, Kiyohiko. (2007) Yotsuba&!, Übersetzer: Wehner, Marcus, Bd. 4, TOKYOPOP, S. 96

<sup>17</sup> Azuma, Kiyohiko. (2009) Yotsuba&!, Translator: Amy, Horsyth, Vol.1, Yen press, p.32

<sup>18</sup> Azuma, Kiyohiko. (2009) Yotsuba&!, Translator: Amy, Horsyth, Vol.4, Yen press, p.87

“Zirp Zirp”というオノマトペの元になったと考えられる動詞“zirpen”は『大独和辞典』（第二版）によれば、「(コオロギ・セミ・小鳥などが) リンリン〈ピーピー〉鳴く」ことを表す。そもそもドイツ語語彙にオノマトペに関するものが少なく、ある種の動物が鳴く声を表すオノマトペに対して一つの語彙でカバーしている様子が見受けられる。さらに、“die Zirpe”という名詞が存在するが、「セミ」を指す語でありながら同時に「コオロギ」も意味する語であると表記がある。*Duden* においてもほぼ同内容の記述がしてあり、“zirpen”が表わすことのできるオノマトペは、「短く、細く、高く、軽く振動する音」であり、例文では“Grille”(コオロギ)、“Heimchen”(イエコオロギ)、“Meisen”(シジュウカラ) が鳴いている主体として挙げられている。

これらの語彙とそれがカバーする概念からは、ドイツ語ネイティブ話者が音と生き物をどのように結びつけて理解しているか、それを表現する語彙はどのようなものかということを翻訳分析に取り入れることの重要性がうかがえる。

### 3. 2. 方言——役割語の翻訳

2章の『よつばと！』の紹介の部分でもふれたとおり、13巻には〈よつば〉の〈ばーちゃん〉が登場し、〈ばーちゃん〉の話す関西弁が特徴的なテキストとして現れる。

〈ばーちゃん〉が関西弁を話すことについて、〈恵那〉が指摘する場面がある。

	(3j) 13 巻, p. 157	(3d) Bd. 13, S. 157	(3e) Vol. 13, p. 157
恵那	おばあちゃんは関西の人？	Kommst du aus der Kansai-Region*? *Region im westlichen Teil Japans (関西地方から来たの?) (*日本の西の方にある地域)	Are you from the Kansai area? (関西地方から来たの?)
ばーちゃん	そうやで 出身はな なんでわかるん？	Das ist richtig. Woher weißt du das? (そうだよ。なんでわかったの?)	It's where I'm originally from. How can you tell? (もともとは関西出身だよ。どうやってわかったの?)
恵那	だって関西弁だもん	Merke ich an deiner Aussprache. (あなたの発音で気付いたよ)	You have that accent. (そんな感じのアクセントだもん)
注			Note: The Kansai region of Japan has own distinctive dialect that comes off more lively and brash than standard Japanese. (日本の関西地方は、標準日本語よりも生き生きとして威勢のいい話し方の特徴的な方言を持っている。)

例 3

〈恵那〉が〈ばーちゃん〉の出身地を話し方から予想し、尋ねるというやりとりだが、(3d)では“Kansai-Region”(関西地方)に注が付けられている。内容は、地理的説明にとどまっている。一方、(3e)ではこの箇所に注は付けられていない。



〈恵那〉が〈ばーちゃん〉の出身地を予想した根拠を述べる部分では、(3j) は単に「関西弁だもん」となっているが、(3d) では“deiner Aussprache” (あなたの発音)、(3e) では“that accent” (そんなアクセント) と話し方の具体的な要素を指摘するものに変更されている。さらに英語版では、関西地方の特徴的な方言の存在、またその特徴を説明する注が付けられている。

この二つの言語版における翻訳の処理は、2章で説明したような役割語の問題に対応したものになっている。「関西弁」という概念を丸ごと他言語に写し取ることは難しい。第一に、関西弁を他の文化的事物のように音写することは不可能である。第二に、置き換え翻訳を行うとすると、翻訳言語文化における方言と置き換えることが考えられるが、その方言と標準語との関係やその方言の持つイメージをオリジナル版と重ね合わせることはかなり難しい。第三に、キャラクター性と結びついた方言の表徴的特徴を書き言葉に適應するという処理が、日本語と他言語では異なる、あるいは別の意味合いを帯びる可能性がある。

このような表現形式的な面、イメージや雰囲気などの両面から翻訳の困難を持つ役割語翻訳であるが、この例ではドイツ語・英語版共に文字テキストに現れる書き言葉的な表現から役割語を翻訳するのではなく、文字テキスト上には表れないマンガの中のキャラクターが耳で聞いている話し言葉において、方言特有の特徴を持っていると訳出していると考えられる。

発音やアクセントは、実際に口に出して話す音声言語的な特徴を主に指す概念であり、いくらマンガの文字テキストが話し言葉を真似たものとはいえ、表現上の特徴となって表れにくい要素である。文字テキストの特徴的な表現として現れないとしても、話者のキャラクター性と強く結びついた役割語を疑似的に読者の読みの中に出現させるための方策をそれぞれの言語版がとっていると考えられる。

他の場面における〈ばーちゃん〉のセリフの文字テキストを見てみると、他のキャラクターのセリフと大きく異なるという印象はない。ただし、ドイツ語版・英語版において、口語的な表現や省略が現れている箇所がいくつか見られる。

	(4-1j)『よつぱと!』13巻, p. 92	(4-1d) <i>Yotsuba&amp;</i> , Bd. 13, S. 92	(4-1e) Vol. 13, p. 92
ばーちゃん	靴脱ぎ散らしたらあかん! // ちゃんと <u>しい!</u>	Die Schuhe werden ordentlich weggeräumt. // Aber <u>dalli!</u> (靴はきちんと片づける。// こら、 <u>急げ!</u> )	Don't make a mess of your shoes! // Tidy them up! (靴を散らかしておかない! // 片づけな!)

例 4-1

(4-1d) において用いられている“dalli”は口語表現で、「急げ、早く」という意味を持つ間投詞である。同箇所の英語版においては、特に口語的な表現は用いられていない。

	(4-2j)『よつばと!』13巻, p. 103	(4-2d)Bd. 13, S. 103	(4-2e)Vol. 13, p. 103
ばーちゃん	ほらよつば梨 よつばは梨好きやつた る?	Hier, Yotsuba, die sind süß und saftig. Du magst doch Nashis, oder? (ほら、よつば、甘くてみずみずしいよ。 梨好きでしょ?)	Here, Yotsuba. You like pears, don'tcha? (ほら、よつば。梨好きだったでしょ?)

例 4-2

この例では、(4-2d)においては文末の“oder”、(4-2e)においては文末の“don'tcha?”という念押しの表現が口語的である。(4-2e)においては、さらに口語的に崩れた発音を表記してある。

ただし、日本語版においては日本語ネイティブ話者が読めば明らかに関西弁であると判断可能な表現、特徴が必ず〈ばーちゃん〉の発話に現れるのに比べると、他言語版に出現する口語的な特徴は微々たる量にすぎない<sup>19</sup>。

また、〈ばーちゃん〉との共同生活を送ることで、〈とーちゃん〉や〈よつば〉が関西弁的な表現を交えて話しているセリフも出現しているが、その箇所に口語的な表現が目立って現れることはない。〈とーちゃん〉や〈よつば〉に〈ばーちゃん〉の話し方がうつるとい現象は、〈ばーちゃん〉が食事や掃除の面倒を見ることで単なる客ではなく小岩井家の家庭の中心的存在になっていること、あるいは小岩井親子が引っ越してくる前に〈ばーちゃん〉と同居していたらしい事情から、同居しているころは〈ばーちゃん〉の影響で二人が関西弁を日常的に話していたのではないかと<sup>20</sup>と想像するエピソードとなっていることなど、物語の雰囲気や背景事情を作り出す重要な要素となっていると考えられる。それらの物語を彩る要素が、翻訳語版では表現されていないことは、日本語版の持つニュアンスを翻訳版が保持できていないことを示す。

この考察からも分かる通り、役割語の翻訳は単に情報を伝達するための文字テキスト以上に、キャラクター同士の関係や物語の雰囲気を暗示的に示す効果も持っている。こうしたマンガに現れる役割語とその翻訳が、他場面や他作品でどのような翻訳がなされているかは一つの大きなテーマとなりうる。

<sup>19</sup> ただし、その言語のネイティブ話者が読むと、標準語とは異なる微妙な差異が現れている可能性も否定できないが、本報告ではそこまで立ち入ることができなかった。

<sup>20</sup> 特に、〈ばーちゃん〉と〈とーちゃん〉は実の親子であるという関係性から、〈とーちゃん〉が母語として関西弁を獲得していた可能性は高いと考えられる。つまり、〈とーちゃん〉が話す関西弁は、〈ばーちゃん〉が話している関西弁がうつっているというよりも、関西弁を話す人物が身近にいることで関西弁の使用を選択しているという可能性である。この予想に基づくと、関西弁を話す〈とーちゃん〉は〈ばーちゃん〉を中心とした家庭・身内的なコミュニティの中で、〈よつば〉の父であるというよりは〈ばーちゃん〉の息子であるという立場をとっていると考えられることもできる。一方〈よつば〉の関西弁は、〈よつば〉がまだ幼児であること、さらに日本語の母語話者ではないことを踏まえると、そこまで複雑なやりとりを意識して行っているとは考えづらい。このようなコード・スイッチングの研究は、社会言語学の分野で盛んに行われていることを付け加えておく。

また、方言の翻訳に関する問題としてもう一つ挙げたいテーマがある。それを端的に示す例を一つ挙げる。

	(5-1j)『よつばと！』13巻, p. 97	(5-1d)Bd. 13, S. 97	(5-1e)Vol. 13, p. 97
ばーちゃん	キウイ // キウイ持ってきたで	Kiwi. // Ich hab euch Kiwis mitgebracht. (キウイ // キウイ持ってきた)	Kiwis. // I brought kiwis. (キウイ // キウイ持ってきた)
とーちゃん	なんでキウイ…?	Warum Kiwis? (なんでキウイ?)	Why kiwis …? (なんでキウイ?)
ばーちゃん	よーさんもろたんよ 上村さんに じーさんとふたりでこんなに食えんからよつばに食わせたらう思てな	Frau Yo hat ein Dutzend von Frau Uemura bekommen. Mit Opa zu zweit würde uns die Hälfte einfach verfaulen. (「よー」さんがいっぱい上村さんからもらったんだよ。じーさんと二人だと半分くらい簡単に腐らせてしまう)	Got a whole passle of 'em from Uemurasan. The two of us can't finish them ourselves, so I thought Yotsuba might like them. (上村さんから山ほどもらったんだよ。うちの二人では食べきれないから、よつばが好きだろうと思って)

例 5-1

各言語版に〈ばーちゃん〉の関西弁表現の代替として口語的な表現が現れているのは前述した翻訳手法の一環であるが、注目すべき点は(5-1d)では、日本語に登場しない“Frau Yo”(ヨウさん)という人物が“Frau Uemura”(上村さん)にキウイをたくさんもらってしまった、という内容になっている。“Frau Yo”なる人物は、オリジナル版の(5-1j)にはもちろんのこと、(5-1e)にも言及がない。ドイツ語版にのみ現れるこの人物が突然出現する理由は、〈ばーちゃん〉の方言使用にあると考えられる。

(5-1j)の「(キウイを)よーさんもろた」という文字テキストは、「(キウイを)たくさんもらった」ことを意味する。「よーさん」とは、「仰山」という語の方言の変化形である<sup>21</sup>。日本語ネイティブ話者が該当箇所を読んだ場合、〈ばーちゃん〉が関西弁話者であることと「たくさん(よーさん)もらった」という文字テキストの内容を即座に理解することができる。一方で、方言的特徴を音写し、ひらがなですべてのテキストがつづられたこの文字テキストを日本語ノンネイティブ話者が読んだ場合、文字テキスト内容をつかみ損ねることは十分ありうる。

そして(5-1d)から推察する限りでは、「よーさん」という語を「仰山」に変換することができずに、「よう」という人物名に「-さん」という人称接尾辞が付いた語を口語的に崩れた発音風に表現したものであると翻訳者が解釈した結果の翻訳であると考えられる。

このような翻訳者の誤読による誤翻訳は、方言へのなじみのなさ、ひらがなのみの表記、長音使用など発音通りの音写などの問題から起こっている。この例においては、方言的な表現が

<sup>21</sup> 「仰山」という語自体は、一般的に辞書に載っている語彙であるが、『日本国語大辞典』(第二版)によれば方言的な使用が認められ、静岡以西の様々な地域での使用、またその変化形の使用がある。そのため、大まかに関西弁の語彙というイメージが強いと言ってよいだろう。特に〈ばーちゃん〉の使用する「ようさん」の使用が報告されているのは、愛知・三重・大阪などの地域である。

誤読の原因として大きいのが、ひらがなのみの表記という要素については『よつばと！』という作品の文字テキストの大きな特徴である、〈よつば〉のセリフは常にひらがなのみで表記されるというルールのために、一般のテキストより頻度が高いという条件を持つ。また、〈よつば〉のセリフに限らず、話し言葉らしさを文字テキスト上で表現するために、長音の使用や口語的な崩れをそのまま音写した文字テキストも頻出する。

実際、このような表記上書き言葉を逸脱したテキストを正確に漢字かな交じり文に復元できずに誤読し、翻訳を行っている例はドイツ語版において他にもある。

	(5-2)『よつばと！』11巻, p. 33	(5-2d)Bd. 11, S. 33
よつば	びざのかみは—ときどきはいつてる！ あたり！ <u>じーだけ</u> のははずれ でもうらがしろいのはすこしあたり	Pizza-Briefe liegen öfters im Briefkasten! Bingo! Eigentlich sind die mit Pilzen doof, aber wenn sie auf der Rückseite weiß sind, sind sie in Ordnung. (ピザのチラシはよくポストに入ってる！ あたり！ <u>キノコのやつ</u> は退屈だけど、でも裏面が白かったらそれは大丈夫)

例 5-2

この例は、〈よつば〉が投函されるチラシについての評価を述べている場面である。〈よつば〉によれば、ピザのチラシは「あたり」、「じーだけ」のは「はずれ」、裏が白いの「すこしあたり」である。これは、チラシを取っておいて切り抜いてスクラップするという〈よつば〉の遊びから想像するに、写真がカラーで印刷してあるピザ屋のチラシはスクラップしやすいために当たりであり、また裏が白いチラシはメモ用紙として使えるためにちょっと当たりなのだと考えられる。問題は二番目に挙げられた条件であるが、「じーだけ」は「字だけ」と漢字かな交じり文に復元でき、まだひらがなとカタカナしか読めない〈よつば〉にとっては理解できず、見た目にも面白くないチラシであることから外れなのだと考えられる。

ひらがなだけの表記、さらに長音の使用の見られるこのテキスト解読と文脈の流れに乗ったテキストの理解が失敗した結果、(5-2d)では“die mit Pilzen” (キノコのやつ) という意味不明な語句が登場している。これは、「じーだけ」という文字テキストを解釈しかねた結果、「しいたけ」という語の言い間違いなのではないかと翻訳者が判断し、一般名詞の“Pilz” (キノコ) に置き換えて翻訳したのではないかと考えられる。

このような誤読による誤翻訳は、マンガテキスト翻訳においてどのような評価を与えられるだろうか。オリジナル版のテキストの情報を正しく伝達していないため、誤訳は誤訳であるという評価も結論の一つではあるが、本報告ではもう一つの結論を提起したい。それは、誤翻訳が文字テキスト理解にどのような影響を与えるか、という点である。

これまでの例のような誤翻訳は、文字テキストの表記や文化背景などの問題から発生する。そして多くの場合、オリジナル版と照らし合わせることによって発覚し、元の文字テキストの語彙や要素、表現から原因を特定し、なぜそのような誤読に至ったのか推定が可能となる。

ただしここで考えなくてはいけないのは、翻訳語版を読む読者が全員その様な経路をたどるとは限らないということだ。物流が比較的容易になった現代では、海外にいながら翻訳作品のオリジナル版を買い求めることはそう難しい事ではない。しかしそれには費用と時間がそれなりにかかる。アニメやマンガを通して日本文化や日本語に興味を持つ人口は、日本のサブカルチャー受容が広がる以前より増えた<sup>22</sup>だろうが、それでもオリジナル版のマンガを手に入れて楽しむような熱心なファンはほんの一握りだろう。いくら海外で日本のマンガ・アニメの受容が広がったとはいえ、たいていの受容者は翻訳語版で作品を楽しんでいる。つまり、たいていの読者はオリジナル版の文字テキストがどうなっているかなど知らないし、興味も持たない。つまり、翻訳語版読者たちの文脈理解は、翻訳語版の文字テキストがどれだけオリジナル版から異なっているかではなく、翻訳語版を通して読んだときに齟齬がないかが評価の基準となるだろう。

翻訳者による誤翻訳は時に文脈を破壊し、読者の理解を阻害し混乱させる。しかし、誤翻訳はオリジナルの情報を欠落させたり捻じ曲げたりするという現象自体を指し、必ずしも読者の理解を阻害するような文字テキストとして訳出することと同意ではないだろう。

ここで今までに見た二つの誤翻訳の例を見てみよう。(5-1d) は、確かに“Frau Yo”なる人物が唐突に登場するが、「上村さんから食べきれないほどキウイをもらってしまった」という文脈自体は日本語版から変わらず、上村さんからキウイをもらった相手が〈ばーちゃん〉から“Frau Yo”に変わっているという内容変更であると考えることができる。そしてドイツ語版では、後ろに続く文字テキストの内容から、“Frau Yo”からさらに〈ばーちゃん〉がたくさんキウイをもらってしまい、〈じーさん〉と二人でも食べきれない量である、ということを暗示していると理解可能である。文字テキスト上では、“Frau Yo”がもらったキウイが〈ばーちゃん〉と〈じーちゃん〉にどう関係するかについての叙述が抜けているが、前後の文脈から一連の流れを読み取ることが一応可能となっている。

対して(5-2d)では、チラシの話をしているはずなのに、“die mit Pilzen”という語の登場は唐突であり、文脈にも合わない。チラシの話の前後ではピザの話をしているため、ピザに関する話題であることじつけることが不可能ではないが、ピザの話題とチラシの話題が混在することになってしまい、やはりその解釈は無理やりすぎると考えられる。

---

<sup>22</sup> 日本語教育の研究分野では、近年海外でアニメやマンガが日本文化・言語への興味を喚起し、日本語学習の強い動機となっているという背景事情を受け、日本のアニメやマンガなどのサブカルチャーメディアを日本語教育の教材として取り入れようとする試みが行われている。その際に、アニメ・マンガの海外受容事情、およびテキストの分析なども教材作成のために行われている。先行研究に熊野・廣利(2008)などがある。



翻訳版だけの文字テキストの文脈だけを判断すると、理解度の差が明らかである。オリジナル版の文字テキストを翻訳者が誤読し、翻訳された文字テキストにオリジナル版からの情報の欠落、あるいは歪みが翻訳に発生しているのは同じだが、その結果文脈を阻害する文字テキストになっているかどうかには大きな差がある。このように誤読の結果生じた誤翻訳のテキストを比べてみると、文脈の整合性という観点を誤訳であるかどうかの評価項目として提案することが必要であると考えられる。

本項では、主に〈ばーちゃん〉の話す関西弁という発話バリエーションの翻訳について翻訳比較を行った。次項では、本項で問題提起された誤読の問題について他の例を見る。さらに、役割語のひとつのバリエーションと考えられる〈よつば〉の幼児らしい話し方を再現するために用いられる、言い間違いの表現についていくつか見る。

### 3. 3. 誤読の翻訳と故意の言い間違い

前項で見た、表記の問題や文化的事物のなじみのなさから起こるいわゆる誤読は他の文字テキストにも出現している。

	(6-1j)『よつばと!』13巻, p. 59	(6-1d)Bd. 13, S. 59	(6-1e)Vol. 13, p. 59
よつば	くらげつかまえた // <u>くらげ!</u>	Hab dich, Qualle! // <u>Nimm das!</u> (捕まえたぞ、くらげ! // <u>食らえ!</u> )	Got the jellyfish! // <u>Jellyfish!</u> (くらげ捕まえた! // <u>くらげ!</u> )

例 6-1

この場面では、〈よつば〉が〈とーちゃん〉にタオルで作ってもらった「くらげ」で遊ぶシーンである。「くらげ」とは水面に浸けた濡れたタオルを下から持ち上げながら端を絞っていき、タオルの中に空気をためることによってクラゲのかさのようなふくらみを作る遊びだが、〈とーちゃん〉に作ってもらったくらげに興奮した〈よつば〉は、両手で捕まえた「くらげ」を「くらげ!!」と叫びながら壁に叩きつける。

この文字テキストが(6-1d)では、“Nimm das!”(食らえ!)となっている。この表現は、同13巻の最終話の〈よつば〉と〈とーちゃん〉が入眠の前のごっこ遊びをしているときに、〈よつば〉が攻撃の態勢に入った際の掛け声、「ゆくぞ!」<sup>23</sup>に対してなされたドイツ語版文字テキストと同様のものである。どちらも、場面的には対象に攻撃を加えるときの掛け声の表現であると考えられる。

しかし、問題の文字テキストは、日本語版本来の内容ではタオルで作られたふくらみを指して「くらげ」と声に出して言っている内容であり、壁に叩きつける行為を元に発話した内容で

<sup>23</sup> あずまきよひこ (2015) 『よつばと!』13巻、アスキーメディアワークス13巻、p. 218



はない。しかし、文字テキストがひらがなですべて表記されていること、〈よつば〉がくらげを壁に叩きつけるというような暴力的な行為に及んでいるという文脈から、ドイツ語版翻訳者は「くらげ!!」という文字テキストを「くらえ!! (食らえ)」と誤読、あるいは故意に読み替え、翻訳を行っていると考えられる。

誤読の理由は、まず文字テキストがひらがなですべて表記されていることにあると考えられる。前述したように、こどもらしい話し方をテキストの表記で表現した『よつばと!』の中では、特に〈よつば〉の話すセリフがひらがなのみで表記されている。そのために、翻訳者はひらがなのみの文字テキストを自力で漢字かな交じり文に復元してから解釈する必要性に迫られる。その際に誤読が発生する可能性については、すでに見た通りである。

この例において特徴的なのは、誤読の大きな理由に文脈が関係していることである。前に見た(5-1)、(5-2)の二つの例については、表記などの問題によって翻訳者が正しく文字テキストを理解することができず、翻訳者が推定した内容を補ったり置き換えたりすることで誤翻訳となっていた例であった。しかし、今回の例については、〈よつば〉が、くらげの名前を叫びながら壁に向かって投げつけるという場面であり、ドイツ語版の“Nimm das!” (食らえ!) という文字テキストが文脈に合致するものになっている。

日本語版において〈よつば〉がクラゲの名前を叫ぶのは、興奮した子供の挙動としてとらえれば不自然なものではないと考えられる。〈よつば〉が動物園に行った際に、動物の名前を連呼している場面などもある<sup>24</sup>。この場面では、その時に叫ぶ動物名が「くらげ」であり、「くらえ (食らえ)」と誤読するのに近い文字列であり、さらに単に叫ぶだけではなく壁に投げつけるという暴力的な行為が同時に起こっていることで、文脈に合致した文字テキストとして翻訳されているという結果になったものと思われる。ここまで文脈と合致している結果を見ると、誤読の産物としての翻訳ではなく、故意に文脈に合う内容に置き換えたのではないかとの考察も可能である。

一方の英語版では、ドイツ語版のような文字テキスト内容の変更はなく、単に「くらげ」という発言を翻訳したものになっている。

さらに、誤読なのか故意の変更なのか判断しがたいドイツ語版の翻訳例がある。

---

<sup>24</sup> 4巻の第19話「よつばとぞう」の中のゾウに呼びかける場面。(あずまきよひこ (2005)『よつばと!』4巻、アスキーメディアワークス、p. 129)

	(6-2j)『よつばと！』13巻, p. 79	(6-2d)Bd. 13, S. 79	(6-2e)Vol. 13, p. 79
よつば	ばーちゃんおりがみでなんでもつくるから // いろんないろで // あかいひつじとかあおいうまとか // きみどりいろのは <u>はこ</u> とか	Oma kann supergut Origami falten. // Wir basteln ganz viele! // Rote Schafe oder auch blaue Pferde. // Und hellgrüne <u>Tauben!</u> (ばーちゃんは折り紙折るのがすごくまい。 // 二人でいっぱい作る！ // 赤い羊とか青い馬とか。 // 明るい緑色の <u>ハト</u> とか)	Granma can make anything with origami! // In all colors. // Like a red sheep or a blue horse. // Or a yellow-green <u>box.</u> (ばーちゃんは折り紙で何でも作れる！ // 色んな色で。 // 赤い羊とか青い馬とか。 / 黄緑の <u>箱</u> とか)

例 6-2

この場面では、〈よつば〉が〈ばーちゃん〉が作ることでできる折り紙の作品を列挙している。その中で、「きみどりいろのはこ（黄緑色の箱）」が（6-2d）では“hellgrüne Tauben”（明るい緑色のハト）となっている。

「はこ」と“die Taube”（ハト・単数形）は一文字違いの語であることから、ひらがなのみの表記のために誤読した可能性が考えられる。また誤読の大きな可能性として文脈と文化的背景を挙げることができる。〈よつば〉が列挙する折り紙の作品は3つだが、「はこ」以外は動物を挙げている。「ひつじ」と「うま」はドイツ語版においては忠実に翻訳されており、この二つの動物の名前と列挙されたために、「ハト」という動物の名前として誤読された場合である。あるいは、折り紙の文化になじみのない翻訳者が、折り紙で作る「はこ」というものが想像できなかったために、ひらがなの「はこ」から「ハト」であると誤読した場合である。さらに翻訳者の誤読という可能性の他に、折り紙になじみのない翻訳語版読者のための配慮として、他に列挙された動物名に合わせるように“die Taube”と置き換えた場合も考えられる。

この場合にも、折り紙で作る「ハト」は存在するし、列挙された作品がすべて動物であるという統一感もあるため、積極的に文脈を破壊する文字テキストとはなっていない。この誤訳、あるいは故意の置き換えが明らかになるのは、オリジナルの日本語版と対照させた場合のみである。ドイツ語版を通して読む際には、全く問題のない程度の変更だといえるだろう。

この項で扱うのは、『よつばと！』の作品の中で大きな位置を占める役割語である、〈よつば〉の幼児的な話し方の表現としての言い間違いである。

すでに言及したように、日本語版では文字テキストをひらがなのみで表記するという方法がとられているが、このような方法がたいいていの他言語版では取ることができない。それを受けて、他の言語版でどのような手法がとられているかについて見てみると、言葉の間違いを新たに挿入することが方法の一つとして挙げられる。

日本語版のオリジナルの文字テキストにそもそも言い間違いが含まれることはあるが、それ以外の本来は言い間違いが含まれない部分に言い間違いを挿入するのである。この方法は、ド

イツ語版・英語版のどちらでもとられている。

	(7-1j)『よつばと！』13巻、p. 44	(7-1d)Bd. 13, S. 44	(7-1e)Vol. 13, p. 44
よつば	あーそんなのぜんぜんだめ	Fuuka, das ist so was von <u>indiskokabel</u> . (風香、そんなもの「問題外」)	Oh no. That one's terrible. (あーあ。それはひどい)

例 7-1

(7-1d) で用いられている“indiskokabel”という語は、正しくは„indiskutabel“ (問題外の) である。

	(7-2j)『よつばと！』13巻、p. 109	(7-2d) <i>Yotsuba&amp;!</i> Bd. 13, S. 109	(7-2e)Vol. 13, p. 109
よつば	とがった！ じどうてきに！	Der Blaisift ist wieder spitz! Ganz von selbst! (鉛筆がまたとがった！ ひとりでに！)	It's pointy! <u>Ottamatically!</u> (先がとがった！ 「自動的に」！)

例 7-2

(7-2e) で用いられている“Ottamatically”という語場、正しくは “automatically” (自動的に) である。

このような語の発音間違いの挿入は、両言語版において他にもいくつか見られる。

ここで特徴的なのは、言い間違いの文字テキストの挿入が〈よつば〉のセリフに現れること、そして出現する位置が各言語版で異なることである。一つ目の特徴は、挿入される言い間違いが、幼児に特有の舌足らずさ、あるいは難しい言葉を使いたがるが言い間違えてしまう様子、さらに〈よつば〉の出自からのノンネイティブらしさを表現するための手法であるためと考えられる。二つ目の特徴は、それぞれの言語の持つ語彙や発音の特徴が異なるために、同一の類似や言い間違いを表現するのが難しいためであると考えられる<sup>25</sup>。

しかし、文脈が言い間違いや言葉の同一性を強制する場合がある。前後のやりとりの流れが言葉の間違いを前提としている場合がそれにあたるが、マンガの翻訳の場合には、吹き出しの位置やキャラクターたちの表情が文字テキストの文脈に一致するように働く大きな強制力となっている。

	(8j)『よつばと！』13巻、p. 93	(8d)Bd. 13, S. 93	(8e)Vol. 13, p. 93
よつば	ばーちゃんおみ	Hast du für mich <u>Geschen</u> ... (私に「おみ」…)	Grandma, sou- (ばーちゃん、「おみ」…)

<sup>25</sup> 全く同一の言葉の類似を翻訳で再現できるのは、翻訳語でも同様の語彙を文字テキストに用いることのできる外来語に関することば遊びが挙げられる。

ばーちゃん	…おみ？	Geschen …? (「おみ」…?)	… “sou”? (…「おみ」?)
よつば	…ちがった // … // おみそしるについてどうおもう？	Ah, nein, nicht. // … // Ich wollte fragen, was du <u>geschtern</u> gemacht hat. (あー、違う、何でもない。// … // 聞きたかったのは、「昨日」何してたかってこと)	… I mean … // … // <u>Sou … Soup!</u> Do you like Misosoup? (…えっと… // … // <u>スー…スープ!</u> 味噌汁(味噌スープ)は好き?)

例 8

例えば小岩井家にやってきた〈ばーちゃん〉に対して、自分からみやげをねだるのは無礼であると〈とーちゃん〉に釘を刺された〈よつば〉が、それを忘れてみやげの話題を口に出しそらになってしまい、それをごまかす場面がある。

「おみ (やげ)」と言いそうになってしまったのに自分で気づいた〈よつば〉が、次のコマでは焦ったような表情になり、さらに次のコマで〈ばーちゃん〉に言いかけたことについて追及された〈よつば〉は、焦りながらも自分の言ったことを撤回しようとし、さらに次のコマで「おみ」から始まる質問をしてごまかす。自分の失敗をごまかそうとする〈よつば〉を表現するために、飛び出る汗や流れる汗、中が白く抜かれた黒丸で表される目をした表情などが描かれている。このような一連の流れとその表現を無視して文字テキストを当てはめるのは文脈を大きく阻害する原因となるだろう。

そこで、ドイツ語版・英語版それぞれの語彙と表現を駆使して、このごまかしを再現しているのが今回の例である。①〈よつば〉は自分からみやげをねだらないように釘を刺されている、②しかし〈よつば〉はみやげのことを口に出しかけてしまい、それをごまかそうとするという二つの前提にのっとなって、(8d) では〈よつば〉が“Geschen(ke)” (みやげ) と言いかけ、それをごまかすために “geschtern” (“gestern” (昨日) の言い間違い) という語頭の似ている単語に置き換えている。(8e) では、“sou(venir)” (みやげ物) から、“soup” という語を持ち出して翻訳しており、全体の文字テキスト内容を日本語版と近いやりとりにして訳出されている。

ドイツ語版・英語版共に、「みやげ」を基本とした言い間違い、ごまかしとして翻訳しているのは同じである。(8d) では“Geschenke”と味噌汁“Miso-Suppe”をリンクさせるのは難しかったのか、別のごまかしに変わっている。“Geschen(ke)”まで言いかけた語を無理やり“gestern”を言い換えたために、発音上の不正確がそのまま表記されているが、むしろこの表現は〈よつば〉がとっさにごまかした強引さとして受け取ることが可能である。(8e) では、“sou(venir)”から“soup”という語を介して、味噌汁“miso soup”にリンクさせ、オリジナルのやりとりの内容をほぼ正確に再現することに成功している。

この例では、それぞれの言語の語彙と表現、内容の置き換えを行って文脈を阻害しないよう〈よつば〉と〈ばーちゃん〉のやりとりを翻訳することに成功していると言えるだろう。

役割語の再現として挿入される言い間違いの他に、文脈が強制する言い間違いやことば遊びと

いうものが存在し、文脈を壊さないよう、翻訳語の語彙や表現で置き換えることが必要とされる文字テキストも存在する。このような翻訳は、今回の例に成功していることもあるが、こじつけ感が強く文脈に違和感を生じさせてしまう場合、あるいは文字テキスト内での処理を放棄し、注をつけて説明する場合も存在する。それぞれのやり方がそのような場合に可能となるのか、文脈の整合性にどれほど寄与するのかについては、さらなる例文収集と分析から明らかにする必要があるだろう。

また、言い間違いの例として微妙な例を一つ挙げる。

	(9j)『よつぱと！』13巻, p. 95	(9d)Bd. 13, S. 95
ばーちゃん	ありや よつぱ いたずらしたんか？	Aha. Da hat wohl ……jemand Blödsinn angestellt, was? (あら。これは誰かさんがバカなことをしたのかな？)
よつぱ	そのけんはいいたくない とーちゃんよけいなことやめて！	Das <u>ist Tee von gestern!</u> Ich sage nichts mehr ohne meinen Anwalt. (これは「 <u>過ぎたこと</u> 」だから！ 弁護士がいなければ何もしゃべりません！)

例 9

(9d) では、“Tee von gestern sein” (昨日のお茶である) というイディオムのような使用が見られる。しかし、このイディオムは *Duden* や『独和大辞典』に記載のないイディオムである。イディオムとして記載されているのは、“von gestern sein” (すでに古くなっている、時代遅れである) であり、“Tee” (茶) がどこから出現したのかが分かりづらい。日本語版の文字テキストは「そのけんはいいたくない」なので、イディオムの意味は合致しても、茶は関係ない文脈である。

この表現に非常によく似た“Schnee von gestern” (昨日の雪) というイディオムが存在する。このイディオムは、*Duden* にも『独和大辞典』にも記載があり、あるものについて、もうだれも興味を持たないことを指す。この例の文脈的にも合致する。ここから考えられるのは、翻訳者が“Schnee von gestern”を〈よつぱ〉が言い間違えた表現として、“Tee von gestern sein”を使用した場合である。“Tee”と“Schnee” (雪) は語末の“-ee”が類似する語であり、言い間違いを表現する代替語であるという解釈が可能である。

しかしこれまでに見た言い間違いは、語の中の発音順番の例が多く、イディオムの語を取り違えた例はあまりない。この例を言い間違いであると断定するにはやや根拠が弱いように思わ

れる<sup>26</sup>ため、ここに報告する。

最後に、〈よつば〉のセリフに関する新たな観点の報告を行い、この項の考察を終わりにする。

日本語版において、〈よつば〉の一人称は自分の名前を呼ぶ「よつば」で統一されている。この一人称も〈よつば〉の幼児らしい話し方の特徴の一つだが、他言語においては日本語ほど豊富に人称代名詞のバリエーションがない場合が多く、役割語の表現の一環で特徴的な人称代名詞の使用が行われている場合もすべて同じ人称代名詞に統一されて翻訳されることが基本である。

しかしこの英語版 13 巻の例文収集を行った際、〈よつば〉のセリフの一人称が“Yotsuba”となり、動詞の変化が三人称変化になっている例がいくつか見つかった<sup>27</sup>。〈よつば〉の一人称が“Yotsuba”として翻訳されるのは必ずのことではなく、英語文法にのっとって標準的な“I”を使用している場合の方が多数である。

この現象については、これまでの例文収集において対象としてこなかった分野であり、この英語版 13 巻のような自分の名前を使った一人称の翻訳がいつから始まったのか、本報告の時点では特定できていない。また、このような現象はドイツ語版では起こっていないという印象があるが、それも今まで対象とするテーマではなかったために、単に見落としている可能性も十分にありうる。このような名前を使った一人称は、子どもらしい話し方の表現手法と考えられるが、出現する際の文字テキストの内容の傾向などが必要であると思われる。

本報告では、標準的でない人称代名詞の使用の出現する頻度、場面などの特定には至らなかったが、自分の名前を使う一人称が英語版『よつばと！』13 巻に出現することについて言及することにどめる。このテーマについての追加分析が引き続き期待される。

この項では、翻訳者による誤読を原因とする翻訳と役割語の翻訳について追加例をいくつか見た。誤読の例については、翻訳版文字テキストの文脈の整合性を保つような例も存在し、故意の置き換え翻訳を行っている可能性も否定できないものであった。誤読を引き起こす可能性のある文字テキストの特徴、翻訳された文脈の整合性を合わせて分析することが引き続き必要である。

役割語の翻訳については、今までテーマとして大きく扱ってこなかった分野であるが、それぞれの言語における表現を使って、役割語の再現を試みていると考えられる例が多数見られた。

---

<sup>26</sup> ドイツ語ネイティブ話者にこの言い間違いについて意見を求めたところ、決まった言い方は“Schnee von gestern”だが、“Tee von gestern sein”の用法も文脈によっては理解可能なイディオムであるとの回答を得た。翻訳者の意志によって、“Tee”に置き換えた可能性も完全には言い切れないが、故意に特徴的な表現として置き換えたとしたらあまり効果的ではないとのこと。

<sup>27</sup> Azuma, Kiyohiko. (2016) *Yotsuba&!*, Translator: Stephen Paul, Vol. 13, Yen Press, p. 58 や p. 165 などで見られる。



マンガ翻訳の要素として、役割語に注目し、日本語版における役割語が持つ効果とはどのようなものなのか、他言語で役割語的な表現を担うのはどのような要素なのか、またどのような表現が日本語版のニュアンスを再現するために用いられているのかなどに注目し、さらなる例文の採取・分析を行う必要がある。

次項では、今まで扱ってきたテーマ以外に特徴的な翻訳例を見て、マンガ翻訳の問題を提示することで本報告の締めくくりとしたい。

### 3. 4. マンガ翻訳の諸問題

この項では、広く翻訳の変更が見られる例文を扱い、そこからマンガ翻訳における問題点を提示する、

翻訳版読者にとってなじみがないであろう文化的事物について、注を付けて説明を補完するという方法は『よつばと！』作品の翻訳においてもとられている。注の内容も、対象となる文化的事物や、それが登場する文脈、各言語版によって様々であるが、他に例があまりない方法を取っている例があったのでここに報告する。

	(10-1j)『よつばと！』13巻、p. 21	(10-1d) <i>Yotsuba&amp;!</i> , Bd. 13, S. 21	(10-1e) Vol. 13, p. 21
よつば	うどんつくってる	Die macht <u>Udon</u> *. *japanische Nudeln ( <u>うどん</u> 作ってる) (*日本の麺類)	She's making <u>udon</u> . ( <u>うどん</u> 作ってる)

例 10-1

	(10-2j)『よつばと！』13巻、p. 209	(10-2d) Bd. 13, S. 209	(10-2e) Vol. 13, p. 209
よつば	うどんと焼きおにぎりか こってるなー	<u>Udon</u> * und gebratene Reisbällchen. Sieht gut aus! *Nudeln aus Weizen mehl ( <u>うどん</u> と焼きおにぎりか。おいそう！) (*小麦粉から作った麺類)	<u>Udon</u> and grilled rice balls, huh? Pretty sweet. ( <u>うどん</u> と焼きおにぎりか、ふーん？ すごくいいな)

例 10-2

ドイツ語版においては、13巻中に二度登場する「うどん」について、二回共に注が付けられるという珍しい方法がとられている。同じ文化物が同じ巻の中で複数回出現がある場合には、一度目の出現時に注が付けられ、以降は注が付けられないという方法がとられていることが多いが、出現位置が大きく離れているためにどちらにも注が付けられた可能性が考えられる。ま

た、注の内容も微妙に異なるのが特徴的である。

また、英語版においてはどちらの文字テキストにおいても音訳されているのみであり、注は付けられていない。「うどん」の語は、これまでの巻に登場しており、そこでは注が付けられている<sup>28</sup>。英語版では、同じ語に対して巻が変わるたびに初出時に同内容の注を付ける方法を取っていたが、ある巻を境に一度注を付けた語について注を省略するという方法に変更している<sup>29</sup>。この方法の変更は、マンガシリーズという媒体の特性上、同じ読者がシリーズマンガを継続して読むことを前提にし、文化物への知識を前の巻からすでに得たものと判断したためか、あるいは発売時期の変化により、マンガ読者たちの日本の文化物の知識がある程度定着したと判断したためと考えられる。

この例は、注をつけるべきと考えられる文化物は何か、また注によってどれくらいの情報を補うか、どのようなタイミングで注による補完を行うかを考えるための一つの手掛かりとなる事例であると考えられる。

次に、文化的な差異を考慮し、置き換え訳を行ったと考えられる例を見る。

	(11j)『よつばと！』13巻、p. 80	(11d)Bd. 13, S. 80	(11e)Vol. 13, p. 80
よつば	よつばいいこにしてたし！ // きのう いたけたべたし！	Und ich war richtig lieb! // Gestern habe ich sogar meine Möhrchen aufgegessen! (だから私は本当に行儀がよかったし！ // 昨日はニンジンも残さず食べた し！)	And Yotsuba was a good girl! // I ate my mushrooms yesterday! (だからよつばはいいこだった！ // キ ノコも昨日食べたし！)

例 11

これは、〈よつば〉がいい子にしていた根拠として、自分な嫌いなものを食べたことを挙げる場面である。(11j)では、〈よつば〉に嫌いなものは「しいたけ」であるが、(11d)では“Möhrchen”（にんじん、特に品種改良で小さくしたもの）に置き換え、(11e)では“mushroom”（キノコ）という日本語版の語彙からの一般訳になっている。

ドイツ語版の変更は、「しいたけ」がドイツ語版読者にとってなじみのないものであったため、子どもの嫌いな食べ物（特に野菜）に置き換えた結果であると考えられる。一方英語版では、「しいたけ」を英語版読者にとってなじみのないものと考え翻訳を変更するのは同じだが、よ

<sup>28</sup> あずまきよひこ（2011）『よつばと！』11巻、アスキーメディアワークス、p.13が初出。ドイツ語版・英語版共に注が付けられている。

<sup>29</sup> 人称接尾辞の注の有無に特に目立って現れる特徴。人称接尾辞はどのような場面の文字テキストであっても出現頻度が高いため、英語版では巻が変わるたびに注が付けられていたが、9巻からは注が省略されるようになった。また、微妙なマイナーチェンジはあるものの、コピーアンドペーストの内容が繰り返され注に付けられていることが特徴的である。

り一般的な名詞に置き換えるだけにとどめていると考えられる。

このような文化的差異を考慮した訳は、何が翻訳語版読者にとってなじみのないものであると判断するかという翻訳上の問題に加えて、各翻訳語文化における文化的背景の影響が見られ、当該文化の当たり前・お約束を推し量るための手掛かりになりうる。このような例を集めていけば、翻訳語版読者が自然だと感じられるような文化的代替要素が集まると考えられ、翻訳の手法を考える際有益であると考えられる。

最後に、マンガの文字テキストにおける大きな特徴であるイラストと共に読むという特徴が、文脈の整合性に関係している例である。

	(12)『よつばと!』13巻, p. 129	(12d) Bd. 13, S. 80	(12e) Vol. 13, p. 80
よつば	とーちゃんもばーちゃんの <u>たまごやき</u> くれるようになって!	Papa, du musst von Oma lernen, wie man Rührei macht. (とーちゃん、 <u>スクランブルエッグ</u> の作り方をばーちゃんから習わなきゃだめだよ)	Daddy, learn how to cook eggs like granma! (とーちゃん、ばーちゃんのみみたいな卵の料理の仕方覚えて!)

例 12

この例では、対象となる文字テキストの前後に〈よつば〉と〈とーちゃん〉がそれぞれ卵焼きを食べている様子が描かれ、卵焼きのイラストが画面にはっきりと描き込まれている。それにもかかわらず、(12d)で「たまごやき」に対応している語は、“Rührei” (スクランブルエッグ) になっている。同じ卵料理ではあるが、焼きながら卵を巻いた卵焼きと、焼きながら卵をかきまぜたスクランブルエッグでは、その形状に大きな違いがある。そして、コマの中に描かれているのは、明らかに卵が巻いてある卵焼きの方なのである。

〈よつば〉らが食べている途中のイラストにとどまらず、食卓の様子をアップにして描かれたイラストでも、食卓の全体が描かれている訳ではないが、確認できるのは卵焼きのみである。

イラストと照らし合わせると、ドイツ語版における“Rührei”は、言及はあっても食卓には存在しないメニューであり、読者がそれに違和感を持つ可能性は十分あると考えられる。

これは、「卵焼き」という料理がドイツ語版読者に対してなじみがないという配慮から、卵を使った料理という類似を持つ“Rührei”という語と置き換えたが、結果的にイラストと整合性を持たない翻訳となってしまった例である。なじみのない料理であるという文化的背景を踏まえて置き換えるなら、“Omelett” (オムレツ) の方が、経常的な類似性を持った語として適当だったと考えられる。

文化的背景を根拠とした置き換え訳と、その結果のイラストとの不整合という翻訳は、「セミ」に関する語の翻訳にも同じ現象が起きている。イラストとの不整合について、翻訳語版読者が

どのくらい違和感を持つのか、置き換え訳による文字テキスト文脈の整合性はどのように変化するのかについて、更なる分析が期待される。

一方(12e)では“how to cook eggs”(卵の料理の仕方)という一段階抽象的にした表現を用いることで、ドイツ語版のようなイラストとの不整合を避けている。英語版読者のすべてが、イラストに描かれた卵焼きを“how to cook eggs”が指している料理であると理解するかは確実ではないが、とにかく〈よつば〉が〈ばーちゃん〉の作る卵料理を気に入っているという文脈は保持される。

以上の三つの例は、特に文化物の翻訳に関して問題の起こっている箇所、あるいは翻訳上の置き換え・注などの方法がとられている箇所を扱った。それぞれの例から、文化物をマンガの文字テキストにおいて翻訳するということ、またその際に発生しうる問題を浮かび上がらせることができたと考えている。

#### 4. まとめ

本報告では、今までの研究報告の中に含めることのできなかつた『よつばと!』最新刊の13巻から集中的に例文を採取し、これまで行ってきた研究報告の継続的な分析につながる補遺的な内容の報告、また特に役割語の翻訳処理、文化的事物の翻訳について特徴的な翻訳が行われている箇所について例を取り上げ、マンガ翻訳における問題を提示した。

その中には、翻訳者自身の理解の間違いから起こっていると考えられる現象もあり、翻訳語版読者の理解のための配慮から生じた結果であると考えられる現象もあった。また、どちらの理由からでも、翻訳の評価というものは結局翻訳語版のみを通しての文脈の整合性が取れていることによるのではないかという仮説を提示した。

本報告では今までの研究報告を基にし、それを補強、あるいは新知見を提供するような現象を中心に扱うことになり、役割語の翻訳、特に一人称の表現など新しい問題観点も提供するに至ったが、さらに他の問題点について言及することができなかつた。

例えば、役割語の使用に関わる翻訳の問題では、イラストの中に話者が描かれていない場合や、連続的に発話が起っており、複数の吹き出しが一つのコマに配置され、話者が示されていないときなどに、誰がそのセリフを発しているのかを役割語から判断する必要のある場面が存在する。そのときに、役割語を積極的に訳出しない手法をとる場合、翻訳語版では話者をどのように示すのか、という問題が発生する。その問題から派生して、話者の特定に翻訳者が失敗し、翻訳前と比べると吹き出しに入っている文字テキストの内容にずれが生じる場合、話者が変更されている場合などが散見された。こうした話者と文字テキストの内容にずれが生じる

場合の、読者の文脈理解はどのようなものかという問題が挙げられる。

また今回は、会話分析や発話行為論的な例を取り扱うことができなかった。例を採取した限りでは、文字テキスト内容が変更されている場合でも、日本語版文字テキストの発話行為や会話の中のシークエンスを引き継いで翻訳されていると考えられる例が多数あった。このような例を集めて分析を行うことは、翻訳者が元の文字テキストをどのように解釈したかを考察することに繋がり、さらに文字テキストの量の制限やイラストとの整合性などの様々なマンガ翻訳における制限がある中で、翻訳がどのように行われているかを考えるための重要な観点となるだろう。

引き続き、会話的な文字テキスト資料として有用性のある『よつばと！』の文字テキストを対象に分析を行うのに加え、他のマンガ作品の文字テキストと横断的に比較できるような現象を特定し、分析を進めたい。

## 参考文献

### 一次資料

- Azuma, Kiyohiko. (2012) *Azumanga Daioh*, Übersetzer: Wehner, Marcus, 1-2Bds, TOKYOPOP  
—— (2007-2013) *Yotsuba&!*, Übersetzer: Wehner, Marcus, 1-12Bde, TOKYOPOP  
—— (2009-2016) *Yotsuba&!*, Translator: Amy, Horsyth (Vol.1, 4-9), Stephen Paul (Vol. 2-3, 10-13), Vol.1-13, Yen press  
あずまきよひこ (2000-2002) 『あずまんが大王』1-4巻、メディアワークス  
—— (2003-2015) 『よつばと！』1-13巻、アスキーメディアワークス

### 辞書資料

- Duden: Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden*, Bd.1-10, hg. vom Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion. 3., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Mannheim 1999  
国松孝二編 (1985, 1998 第二版) 『独和大辞典』(第二版)、小学館  
小学館 『日本国語大辞典』(第二版) Japan Knowledge、<http://japanknowledge.com/> (参照：2017-2-27)

### 二次資料

- あずまきよひこ (2014) 「特集 まんがのはなし[巻] よつばと！あずまきよひこインタビュー」、『季刊エス』12(4)、pp.22-33、飛鳥新社  
あずまきよひこ、伊藤剛 (聞き手) (2006) 「キャラクターがそこにいるというマンガを」、『ユリイカ』38(1)、pp.108-117、青土社

- ウンサーシュッツ・ジャンカーラ (2010) 「人気マンガのコーパスで見る文字表現の分類について」『日本マンガ学会第 10 回大会プログラム・発表要旨集』、京都、日本マンガ学会
- (2011) 「マンガにおける文字表現の視覚的区別とその役割について」『日本マンガ学会第 11 回大会プログラム・発表要旨集』、高知、日本マンガ学会
- (2012) 「書き言葉として見るマンガとその表記上の特徴」『日本マンガ学会第 12 回大会プログラム・発表要旨集』、東京、日本マンガ学会
- 大塚萌 (2016) 「日独比較文化から見る「なじみのないもの」の翻訳手法——日本マンガ『よつばと!』のドイツ語訳における「セミ」、『人文社会科学研究』第 32 号、pp.159-179、千葉大学
- (2016) 「「なじみのないもの」の翻訳と誤訳に関する考察——日本マンガ『よつばと!』のドイツ語訳における「たい焼き」、鴻野わか菜編『生存と共生—人文学の現在』千葉大学研究プロジェクト報告書第 304 集、pp.96-104、千葉大学
- 熊野七絵 (2011) 「アニメ・マンガの日本語 ～ジャンル用語の特徴をめぐって～」、『広島大学国際センター紀要』1、pp.35-49、広島大学交際センター・国際教育部門
- 熊野七絵、川嶋恵子 (2001a) 「「アニメ・マンガの日本語」Web サイト開発—趣味から日本語学習へ—」、『国際交流基金日本語教育紀要』7、pp.103-117、国際交流基金
- (2011b) 「アニメ・マンガの日本語～ジャンル漢字の特徴をめぐって～」、『広島大学留学教育』15、pp.17-31、広島大学国際センター
- 熊野七絵、廣利正代 (2008) 「「アニメ・マンガ」調査研究—地域事情と日本語教材」、『国際交流基金日本語教育紀要』4、pp.55-69、国際交流基金
- 定延利之 (2007) 「話し手は言語で感情・評価・態度を表して目的を達するか? : 日常の音声コミュニケーションから見えてくること」、『自然言語処理』14(3)、pp.3-15、言語処理学会
- (2014) 「キャラクタから見た翻訳の問題と解決」、『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』113(440)、pp.1-6、電子情報通信学会
- 藤濤文子 (2004) 「翻訳における注のコミュニケーション機能について——『キッチン』の独英訳を例に——」33、pp.27-38、神戸大学
- 諸岡知徳 (2010) 「マンガのことば——マンガ表現論」、『甲南女子大学研究紀要. 文学・文化編』46、pp.29-40、甲南女子大学